

クラシック音楽祭観客にみる芸術至上主義の受容

——サイトウ・キネン・フェスティバル松本に関する調査の分析②——

京都大学 川本彩花

1 目的

本報告の目的は、「芸術崇拜の思想」(松宮 2008)ともいうべき芸術至上主義は、現代日本においてどのように受け入れられているのかについて、クラシック音楽祭の観客(オーディエンス)を対象とした調査をもとに検討することである。一般的に、「芸術」や「芸術家」といった概念は、近代以降に生まれた比較的新しいものであるといわれる。近代以前に「芸術家」は存在せず、音楽家や画家、彫刻家らは、宮廷や教会に雇われ命令・依頼に応じて創作する「職人」的存在であった。そのため、彼らの仕事は今日的な意味での「芸術」とはみなされておらず、音楽作品や美術品も儀式や礼拝のための付属品として位置づけられていた。しかし近代以降、これらの活動を「芸術」として崇拜する動きが現れるようになる。その極点に位置するのが芸術至上主義であるといえよう。では、このように西欧近代で生まれた芸術至上主義は、現代日本においてどのように受け入れられているのだろうか。本報告では、この問いについて、音楽に焦点を当てて、ある音楽祭の観客(オーディエンス)を対象に実施した調査票調査の結果をもとに、検討を進める。

2 方法

本報告で用いるデータは、「サイトウ・キネン・フェスティバル松本に関する調査」(研究代表:辻竜平(信州大学))である。この調査は、2012年8月に「サイトウ・キネン・フェスティバル松本 2012」の観客(オーディエンス)を対象に実施した調査票調査である。調査票の配布数は2000票で、有効回収数は610票、回収率は3割程度であった。

3 結果・結論

芸術至上主義を被説明変数として重回帰分析を行なった結果、次の点が明らかになった。まず第1に、教育年数が長い人ほど、芸術至上主義的な志向性をもっていないことが分かった。第2に、クラシック音楽への関与が高い人ほど、芸術至上主義的な志向性を強くもっていることが分かった。そして第3に、テレビやラジオなどのクラシック音楽の番組を視聴してクラシック音楽になじんだ人ほど、芸術至上主義的な志向性をもっている傾向がみられた。これは、演奏会に足を運ぶ、楽器を演奏するといった身体的実践ではなく、専ら非身体的なメディアを通して音楽を消費することで、その音楽消費は(「社交」の要素が排除されて)個人化し、芸術観は(身体性が排除されて)より精神的な純化したものになったことを意味すると考えられる。さらなる分析結果と考察については、当日詳しく報告する予定である。

文献

松宮秀治、2008、『芸術崇拜の思想——政教分離とヨーロッパの新しい神』白水社。

【付記】本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業「文化資本と社会関係資本の関連性：クラシック音楽祭参加者への調査によるアプローチ」(課題番号 23653121, 挑戦的萌芽研究, 研究代表:辻竜平(信州大学))の補助を受けた。